

## ムルソ・閉じられた空間の彷徨

神 戸 仁 彦

### 太陽と海

ロラン・バルトは、『異邦人』発表後十年して、再読し、つぎのように論評している。「ムルソは肉体的に太陽に従属した人間だ。そしてこの服従は聖化された意味にとる必要があると思う。古代神話やラシーヌの『フェードル』とまったく同じく、ここでは太陽があまりに深い体験なので、宿命と化している」と。そして太陽の三通りの表われ方を、埋葬、浜辺、審理の三つの場面に割りふっている。

冒頭の葬儀の太陽は明らかに物質を溶化する力そのものである。顔の汗とか、葬列の進む炎熱の街道の溶解したアスファルトとか、ここはすべてがベトついたイメージである。ムルソは儀式から離れられないように、太陽からも離れられない。太陽の火はこの場面の不条理を照らしだすと同時にそれを溶化させる働きをしている。浜辺では別の太陽の顔。液化するのではなく、凝固し、すべての物質を金属化する太陽は、海を長剣に、砂を鋼に、動作を殺人に変質させる。太陽は、人間の柔らかかではやけた身体に対峙する武器であり、剣であり、トライアングルであり、切断である。そして最後にムルソの裁かれる法廷では、乾いた太陽、埃となった太陽、地下埋葬室のひなび光線と化した太陽として現われる<sup>(1)</sup>。

鋭い指摘である。バルトは冒頭からムルソにつきまとして離れない太陽を同一視せず、差異化して、そこに物語における必然を読みとろうとしている。『異邦人』には、アルハンブラの水のように、太陽が遍在する。一方には「正午、この正しきものが火で構成する」<sup>(2)</sup>至天の、絶対的な太陽がその圧倒的な力を誇示する。クライマックスは無論殺人の場面である。

太陽の灼熱が頬に広がり、眉に汗の雫のたまるのが感じられた。それはママを埋葬した日と同じ太陽だった。あのときのように額がとりわけ痛かった。額の血管の動悸が皮膚の下で激しくなった。もう耐えきれなくなった熱さのせいで一歩前に出た。馬鹿げている、一歩動いたからといって太陽を振り払うことはできない。それは分かっていた。でも前に出た。一歩だけ。するとアラブ人は、身を起さずにナイフを取り出し、それを陽光のなかにかざし、こちらに向けた。光が鋼の上を走り、きらめく長い剣のようにこめかみを直撃した。その瞬間、眉にたまっていた汗が一気に瞼を流れ落ち、温く分厚い膜で瞼を蔽った。両眼はこの涙と塩のヴェールの背後で見えなくなっていた。額には太陽のシンバルの音と、それと一体化した正面のナイフからはとばしり鳴りわたる剣しか感じられなくなった。この焼けた長剣は睫を削り、痛む眼をえぐった。そのとき、すべてが揺らいだ。海は濃厚な熱い息吹を送りこんできた。空は全開して火の雨を降りそそいでいるようだった。全身がこわばり、ピストルをもつ手がひきつった。引き金はスムーズに動き、わたしは銃のスペースベットの腹に触れた。そのとき、乾いた、耳を聳する音とともにすべてが始まった。<sup>(3)</sup>

具に語られているのは、ムルソの敗北である。ムルソは太陽と戦っていたのだ。かれは太陽に追いつめられ、半ば意識を失い、錯乱状態に追いやられる。引金におかれた指に力を与えたのは太陽であった。かれの敗北はトータルなものなのだ。銃の轟音とともに覚醒した（「汗と太陽を振り払った」）かれは、もはや太陽の系統に属する人間であることを止め、人間の秩序のなかに組入れられるほかはないことを確認するかのよう、まるで太陽の子であることを断ち切るかのよう、に銃倉に残されたすべての弾丸をアラブ人に射ちこむのである。殺人までのムルソの歩みは太陽に支配されていた、太陽

と一体化していたともいえる。かれは、社会の規範にはまったく表面的にしか対応しないが、太陽のあり様には全身で反応してきた。しかし以後、この物語は徹頭徹尾夏物語であるのに、かれの頭上に太陽の輝くときは訪れない。「正しきものの」の支配と後見は去ってしまったのである。

しかしながら、「また見つかった。何が。永遠が。海と溶け合う太陽が」という至福の感覚をもたらず太陽もまた、他方の極にあるのである。

導き手は、ニンフのような、人魚のような、マリである。

ブイの上のかの女のそばによじのぼった。天気はよかった。ふざけたふりをして、頭をうしろに倒し、かの女の腹の上にのせた。かの女は何もいわないのでそのままだった。眼にあるのは空の全体だった。青と金色だった。マリの腹がうなじの下で静かに上下するのを感じた。二人はまどろんで長いことブイの上にいた。太陽が強くなりすぎたとき、かの女は水に飛びこんだ。かの女の後を追ひ、つかまえ、腕を身体にまわして、一緒に泳いだ。<sup>(5)</sup>

マリがある遊びを教えてくれた。泳ぎながら、波の頂上で水を含み、口にあぶくをいっぱいのためこんで、あおむけになり、その水を空に向けて噴き上げるのだ。すると水は泡のレースみたいに空中に消えたり、生あたたかい滴となつて、顔にかかってくる。しかし、しばらくすると口のなかが塩からく焼けるように感じた。するとマリが追いついてきて、水のなかですがりついてきて、唇を押しあてた。マリの舌が唇をさわやかにしてくれた。しばらくの間、二人して波のまにまをころげまわった。<sup>(6)</sup>

ムルソは海とマリを介在しさえすれば、全身に陽を浴びても、太陽を直視できるし、自在に太陽と戯れることもできる。太陽に向つて海水を噴射して、反抗することすらできる。二つの身体の運動だけが太古からの自然のなかに刻印され

ていく。あるのはただ広がる海と、照りつける太陽、曇りなき天空、そしてしなやかな、張り切った身体。時は消え、ひとは太古に戻ったような錯覚をおぼえる。しかしながら、読むものが立会っているのは、自然としての太陽とか海とか身体とかではない。そうではなくて、言葉というものが創出した神話、永遠の相のひとつなのだ。

私見によれば、言葉はここではじめて男女の対で海や太陽と戯れている。以後書き連らねられることになる海や太陽との融合、海との結婚の嚆矢がここに見いだされるのではないかと思われる。その意味でムルソは、バルトのいうように古代の神話のなかだけにいるのではなく、文学の神話とその刷新のなかにもいるのである。

### 行為と言葉と

罪と罰の不均衡は永遠のものである。それは罪も罰もそれ自体としては存立できないことに起因している。

他方、罪と罰が対象とする行為はそれ自体として完結している。行為はムルソのいうように「昼間の均衡と、そこに幸福を感じていた浜辺の独特な沈黙をうちこわす。世界はあるがままの状態で存続し続ける気配なのに、行為はそこに力を加え、変形してしまう。変形する力としての行為は、その結果を生みだし、結果としてのみ存在するようになる。行為者だけが、その力を体験し、変形に立会っている。そこは言葉の世界ではない。力学的あるいは物理的エネルギー交換の場である。したがって行為は不可逆的であり、絶対的なものである。そして行為後残存するのは痕跡だけであり、行為そのものは消滅してしまう。そして残存物が死体である場合には、消え去った行為が犯罪とみなされ、ひとは罪と罰との不均衡を通過しなければならない。「異邦人」ムルソもまた例外ではない。

## 罪と罰と

ムルソを待ちうけているのは言葉の世界である。しかしそこはときとしてムルソが体現していた神話的な、宿命的な世界ではなく、プラスとマイナスが、有利と不利とがその場で速座に判断される世界である。二種の異質な言説園が待ちうけている。公的なものと私的なものとそれは丁度、罪があくまで個別的なものであるのに対し、罰の方は普遍的であろうとすることに見合っている。そしてこの乖離を権力は裁判という形で埋めようとする。

フランスの司法制度においては、殺人等の重罪は重罪院で審理される。その場合には必ず予審が開かれ、大審裁判所の判事が予審判事をつとめ、罪の有無、種類、性質を審理し、該当する場合にのみ、案件を重罪院に移審する。重罪院は陪審制をとり、控訴院の部長またはその裁判官が裁判長となり、大審裁判所の所長または裁判官が陪席として加わる。九名の陪審員と二名の裁判官の秘密投票で、評決が行われ、八名以上の多数によって決定される。

したがってムルソが出会うのは予審判事である。判事はムルソを値ぶみする。さらけだしてしまうのは、自己弁護をする必要のないムルソの方である。太陽はカーテンで遮断され、部屋はランプ一つの光だけである。ムルソは自分の考えをのびのびという。

弁護士を選んだかどうか知りたがった。ノンと答え、弁護士をつけることは絶対に必要なのかとかれに質問すると、「なぜ」とかれはいった。事件はごく簡単なものだと思うと答えると、かれは微笑みながらいった。「それもひとつの考えだが、法というものがあります。もしあなたが弁護士を選ばないのなら、私達が職権で選任することになります。」裁判がこんな細かい点まで規定しているのはとても好都合だと思い、かれにそのことをいうと、かれも同意し、法律は

よくできている、と話を結論づけた。<sup>(7)</sup>

判事はムルソの知的能力を読みとつたのである。ムルソの客観化能力と言語化能力を。権力が裁判で収集した言語化され、客観化された知の巨大な知の貯蔵庫こそ権力の核心を構成している。それは教会の、中世以来の懺悔の集積が教会支配の主要な手段であつたのと同様である。支配の構造は同質なのである。だから判事が十字架上のキリストをもち出してきても何の不思議もないのである。ムルソは判事と同じ水準で事件を再構成することを望まれている。判事があなたの助けになるという科白はそういう意味なのである。ではその水準とは何を前提にしているのか。

つぎの尋問のとき様子は一変している。太陽が秘密を明されるのを拒むかのように、その同じ部屋に君臨しているのである。

午後の二時だった。今度は薄いヴェールを貫いた光が部屋中に満ちていた。非常に暑かつた。<sup>(8)</sup>

判事は太陽に無頓着である。前回と同じように微笑しながら、事件の一日をまた繰り返すよう促す。それがすむと、

しばらく黙つた後、立ち上がり、あなたを助けたいと思う。あなたは興味を引くし、神の加護により、あなたのために何かしてあげられる、といった。<sup>(9)</sup>

そしてかれの考える核心の部分に入つて行く。

相変らず前後の脈絡なしに、判事はピストルを立続けに五発発射したのかと尋ねた。考えてから、最初は一発だけ、そして数秒後に残りの四発を撃つたと明言した。「なぜ最初と二番目の間に間をおいたのですか」とかれはいう。またしても赤い浜を見、額に太陽の火傷を感じた。しかし、何も答えなかった。<sup>(10)</sup>

「なぜ、なぜ横たわる体に弾をうちこんだのですか」<sup>(1)</sup>

判事の目には、ムルソの自白のなかでここだけが曖昧なのである。しかしムルソは黙して語らない。判事は自己の信仰まで告白して、ムルソを語らせようとする。それはかれがここに意志的なものを感じとり、それを白状させようとしているからである。

裁判はなされた行為を裁くことはできない。行為そのものは消滅し、残されたのは結果だけだからである。しかし結果によって裁くことも不可能なのである。なぜならそれは「目には目を歯には歯を」という等価性の論理と当事者間の直接性に身をゆだねることを意味し、その場合には裁判そのものの存立基盤が失われてしまうからである。したがって裁判は、行為者を責任ある主体とみなし、個としての主体の意志表現が行為（犯罪）だと確証したのである。したがってムルソが二回の発射の間においた空白の時間、撃たれて横たわるアラブ人の肉体にさらに発射された四発の弾丸。前者を反芻の時間として、後者を決断された行為として、そこにムルソの意志を確認したのである。意志を認めさえすれば、死体はそこにあったのだから、行為を意志的な犯罪と認めざるをえない。それは結果として罰の奥底にひそむ普遍性を暗黙のうちに容認することにつながっていく。これが近代国家の法のあり様であり、そこではあくまでも個人が確立されていることが前提とされるのだ。予審判事はムルソのなかに必ずしも悪意からではなく、個人をつくりあげようとしてもいるのである。ミシェル・フーコーはこう書いている。

身体や動作や言説や欲望が個人のものとみなされ、確立されること、これこそまさに権力が最初につくり出したもののひとつである。つまり個人は権力と対峙したものではないということだ。個人は権力が最初につくり出したもののひとつなのだ。個人は権力の結果物であり、同時に個人が権力の結果物になるにつれて、個人は権力の中継点になる。権

力は確立した個人を通過して行く。<sup>12)</sup>

フーコーのいうところは明確であろう。確立された個人とは、権力に外在するものではなく、権力と同時に誕生し、そしてときとして循環する権力を担う中継点なのだ。そして裁判においては、個人は権力の補完として、つまり権力の想定する確立された個人として扱われなければならないのだ。その意味で、予審判事の論理は正当的である。かれのいうように、法はよくできている、よく整備されている、それも個別的な個人よりも前に。だがこのような個人とは無縁であることがムルソの異邦人性なのである。かれは近代的な自我とか個人とかいうものがひとつのフィクションであるのを知っているかのである。

判事の力ではムルソに罪を認めさせ、改悛の情を起させることはできなかった。しかしながら権力はかれを屈服させる装置を幾重にもはりめぐらしている。ムルソはそれらをくぐらなければならない。

## 剥離

予兆は散在していたのである。

養老院の院長はムルソを「わがいと子<sup>13)</sup>」と呼びかけるし、養老院のあるマランゴの司祭は「わが息子」と呼ぶ。ムルソが代筆した手紙を二度も読み上げると、満足したレモンは「お前には世の中のことがよくわかってるよ<sup>14)</sup>」と、突然テュトワイエしはじめる。

各国語の人称代名詞は独自の歴史と構造をもっていて、他国語には移しにくいもののひとつである。フランス語では、二人称が「チュ」(Tu)と「ヴ」(Vous)に分れている。これは相手との距離、親しさの程度を表わしていて、微妙に使い



わけられている。例えば、マリはムルソと再会した海岸ではムルソに「ヴ」を使うが、刑務所に面会にきたときには「チュ」で呼ぶ。二つの二人称の使い方が、相手との関係を示す指標になっている。しかし日本語の場合には、二人称の代名詞は、一人称と共に、異常に発達していて、多様である。「きみ」「お前」「あなた」「おぬし」「そち」「貴殿」……とラブレー的列挙が可能である。しかも日本語では主語人称代名詞は必ずしも使われない。いや使われない方がむしろ普通である。使われないのになぜこのように豊富なのだろうか。それは日本語が本来的に場の言語であることに由来しているのではなからうか。その場にいる人間とない人間がはっきりと区別される言語なのである。したがって、一・二人称の豊かさと、三人称の代名詞の貧弱さの対照にそれがよく表われている。では使わなくてもすむ代名詞を用いるのは、どんなときなのか。そこには身分関係を明示する働きが込められている。上下関係、目上、目下の関係を示したいときに用いられる場合が多いように思われる。したがって「お前には世の中のことがよくわかっている」と訳されたレモンの言葉は必然的に上下関係に組み込まれ、「お前呼ばわりする」という傲岸な態度の表明ととられかねなくなってしまう。しかしながらフランス語の文脈では、ここでレモンは相手との距離をとりはずしたいと望んでいるのであり、つぎの「本当の仲間」(co 共に、pain パンを)という言葉の前提条件を口にしてしているのである。

自他の境が次第に危くなっていたのである。

事件後、キリスト像を振りかざしながら、予審判事も突然ムルソをチュで呼ぶが、これはムルソを威圧するためよりか、むしろキリストの苦悩の前でムルソと同一線上に並びたいという判事の真摯な態度からでたものであろう。

この段階までならば、ムルソも、どうでもいい、沢山だ、とひとりごちしていればすむ問題なのだ。しかし法廷での最終弁論で、弁護士は「わたしが殺したことは確かです<sup>15</sup>」と一人称を使って話しはじめる。驚天したムルソは憲兵に尋ねる。「どの弁護士もそうしている」という答えが返ってくる。弁論は続く。

かれからみると、わたしは模範的な息子であり、息子はかれの母親をできる限り長く扶養した。しまいにはわたしは、わたしの生活手段では与えられないような安寧をあゝの老婆に与えてくれることを、期待したのです。<sup>16</sup>

ムルソは「わたし」と「かれ」の間をシーソーのように行き交いつつ、奇妙な感覚に襲われる。「これはまたしてもわたしを事件から遠ざけ、わたしをゼロにしまっている」という感覚に。だが侵害されるのは人称代名詞だけではないのである。

収監されたムルソはまず抱束されるだけでなく、禁欲を強いられる。ムルソの嗜好、煙草とマリが断たれる。煙草と女にかんしては、かれにはその理由がのみこめない。看守長に尋ねてみる。世間知は答える。「でもそのためにこそあなたを刑務所に入れたんですよ」——え、そのためですって——もちろん、それが自由ということなんです。あなたは自由を剝奪されたんですよ。<sup>18</sup>」ムルソは罰というものの実体を納得させられる。

聖アントワヌの誘惑の日々が続くが、ムルソは肉体的な欲求は克服することができたという。しかしつぎに、時をやりすぎなければならぬ。追想と意志的な記憶の換起で時間を殺す術も心得たという。住んでいた家全体を限りなく細部にわたって、すみずみまで思いだし、完全な一覧表をつくりあげる。それを何度も何度も、欠落を埋めながら、できるかぎり細かに繰り返し作成する。こうしながらほぼ一年の予審、未決期間をムルソは無為の、かれ自身によればひどくふくれあがった日々をすごす。それは無為の日々を無為でなくするための努力である。努力することに意義をおき、それに自分を慣らす訓練である。だから訓練そのものが目的と化す。しかもそれが何のためかは判然としないのだから、しかも訓練そのものは無意味だと自覚していて続けるのだから、訓練そのものが自立して、訓練する者を次第に吸収してしまふ。何のために時を殺すのかと問うてはならないのである。時を殺すために時を殺すというしかないのだから。この時を殺すために時を殺すという同義反復は、生とは生きることだという同義反復と背中合せなのである。目的もなく、日々

新しさもなく、ひたすら生きていよと命令されているのだ。自由を奪われた者は、このむきだしの生の相貌を生きなければならぬ。そのとき何かが変質してしまうのである。

ある日看守がきて、ここに来てからもう五ヶ月になるといったとき、ああそうかと思ったが、納得はしなかった。断え間なく独房に同じ一日が打ち寄せてきて、わたしは同じ仕事を続けてきただけだ。その日看守が去った後で、鉄の柵に自分を映してみた。その顔に微笑んでやろうとしても、顔は真剣そのものだった。目の前の顔を揺り動かしてみた。微笑んでみた。顔は相変わらず厳しく、悲しそうだった。……この時刻、わたしも真剣になる時刻なのだから、映った顔が真剣でも驚くにはあたらない。しかしその同じときに、数ヶ月来はじめて、自分の声を音としてはっきりと耳にしたのである。その声は長きにわたって耳もとで鳴りひびいていた声だとわかった。その間中ずっとわたしは独り言を言っていたのだと、納得した。<sup>19</sup>

誰にも想像がつかないのだ。肉体は齟齬をきたし、精神は分裂する。孤独という単語の孤と独が分裂して、独り歩きしているような個人のあり様。ムルソは力ずくで、自己剥離を体験させられたのである。

「目には目を」の直接性から身を離そうとした法体制は、決して残酷さへの配慮からそうしたのではないのである。それにしても未決期間とは一体何なのだろう。しかも、もしそれが冤罪であるときには。

罪と罰の不均衡は永遠なものなのだろうか。

### 物語は勝利する

時を殺すムルソの努力を助けたものがもうひとつあった。かれがベットのの中でみつけた古新聞のなかのある記事であ

る。以前、かれのアパートでは、ドイツのものらしい塩の広告に興味をひかれ、スクラップしておいた。しかし今度は言葉の断片ではない。チェコスロバキアでおきた事件の話である。金をもうけようと村を出た男が、二十五年後に財をなし、金持になって妻子を連れて戻ってきた。残した母を妹を驚かせようと母の家に入るが、息子だとは気づかない。からかうつもりで一晩泊ってみようと思い立ち、金をみせびらかした。その夜母と妹を男を撲り殺し、金を奪い、死体を河に投げこんでしまう。翌朝訪ねてきた男の妻が、息子だと告げると、母は首を吊り、妹は井戸に身をなげたという記事である。

一面ではありそうもない話だが、他面では自然な話でもあった。この旅人はこうした罰をうけるに値したと思うと同時に、決してからかったりしてはいけないとも思った。<sup>20</sup>

と、ムルソは感想を述べているが、かれはこの記事を数千回も読んだという。読むのはこの記事だけなのだから、かれの内部に固定観念のように死というものが巢食いはじめ、定着していったのである。ムルソの行った殺人も予審や法廷で繰り返されるたびに物語の様相を帯びてくる。一般的な殺人の物語と子殺しの物語。そしてムルソの事件のつぎには父親殺しの裁判も控えているという。ムルソは殺人の物語に取りこまれている。欠けているのは母殺しの物語だけではないのか。物語の循環は完了すべく用意されている。

生は偶然に満ちているのに、物語にあっては必然の連鎖のなかにすべてが組み込まなければならない。そして裁判とは優れて物語の場合なのである。

裁判は行為そのものは裁けないのだから、行為者を裁くことになる。ムルソの偶然にみちた生、レモンの証言するように、浜辺にいたのも偶然、手紙を書いたのも偶然。この生に裁判は外的、そしてときには内的必然を読みといて、物語を完成させなければならない。作り手は検事である。しかしこの作者は白鳥を孵したアヒル、アヒルを孵してしまった白鳥であってはならない。原因と結果は均衡していなければならないのである。したがってムルソの犯罪に見合った原因が探

索される。見合った形に読み直されるというべきであろう。

母親を養老院に送りこんだこと。その通夜の席で平気でキャフェ・オ・レを飲み、煙草をふかしたこと。葬儀でも何の感情も示さなかったこと。母親の年齢すら知らなかったこと。埋葬の翌日にはもう海水浴に行き、マリで出会い、関係をもったこと、と母親にたいする愛情のなさが強調される。さらにレモンと謀って、かれの女に手紙を書き、かれの仕打ちに手をかしたこと。浜辺でもレモンの敵を襲い、レモンが傷つけられると、復讐のためにピストルをもって一人で出かけ、計画どおりにアラブ人を撃ち倒し、「仕事がつまく行ったことを確めるために」なお四発の弾を、落ち着いて、確実に、いわば熟慮して撃ちこんだ<sup>(21)</sup>と結果づける。なぜならムルソはインテリであり、言葉の価値を知っている。だから「自分のすることを考慮せずに行動したとは、いえない<sup>(22)</sup>」と結論づけられる。

論理はさらに発展する。母親にたいする非情は精神的な犯罪にあたる。母親を重罪人の心で埋葬した。それは精神的に母親を殺したも同然なのだ。したがって明日行われる父親殺しと同様に裁かれなければならない。

精神的に母親を殺害したこの男は、その父にたいし自らの手を下した男と同じ資格で、人間社会から抹殺されるべきだ。ともかく、前者は後者の行為を準備し、いわば予告し、正当化しようとしているのだ<sup>(23)</sup>。

そしてこう結論する。

この男に死刑を要求します……この苦痛な義務が、ひとつの至上の、神聖な命令の意識と、そこに怪物じみたもの以外の何もかも読みとれない男の顔をもつ男を前にしてわたしのいなく恐怖とによって、償われ、釣合<sup>・</sup>い、光をうけるように感じたのははじめてです<sup>(24)</sup>。(傍点引用者)

検事の意識では、物語は二重の意味で完成したのである。殺人、子殺し、父殺し、そして母殺し、と連鎖がつながると

同時に、罪と罰との不均衡という難問が解消される機会をもえられたからである。

### 物語には物語を

南フランス、トゥールーズで列車を降りたとき、十時はすでに過ぎていた。駅を背に街中へ向けて歩きはじめた。北国の夏とはいえ、八月の終り、陽はすでに没していた。西の空の残暮も止もうとしていた。この時刻観光案内所は閉まってしまったから、一人で宿を探すしかない。目抜き通りのホテルは、車もうるさいし、値段も高い。見当をつけて大通りを左に曲がり、さらに右に折れたところにホテルの灯が見えた。値段を聞いて、すぐそこに決め、エレヴェーターで六階に昇った。建物の最上階だった。降りたところで踊り場が少し狭いと感じたが、気にせず部屋に入り、そのままベットにもぐり込んだ。どうせユーレル・パスに追われる旅なのだから、サン・セルナン教会と美術館のロマネスク彫刻群がそれほどでなければ、また汽車に乗るだけだ、と肚はくくっていた。翌朝夏の早い朝日を期待して目を覚したが、少し妙な感じがした。昨夜はドアを開け、服を脱いでそのまま寝たので周囲を気にしなかった。起き出してみると、壁があつて簾笥があつて、また壁があつて、机があつて、椅子があつて……窓、窓がないのである。四方が壁で、ドアだけが開口部なのだ。思わずふりあおぐと、天井にガラス窓があいていて、そこから光が入ってきている。天窓、いや天井窓だけの部屋だったのである。妙な感じはそこからきていたのである。

しばらくすると、じっとしてても、動いてみても、次第に平衡感覚が狂わされていく感じに襲われる。空気は澱み、壁のように追ってくる。外部とは完全に遮断されてしまったような気分におちいる。上部へと脱出したい衝動が強くなってくる。椅子にのつて、天上窓を最大限、二十センチほど開けてみるが、顔をそこからは出せないのです、状態は変らない。「監獄だ」と思った。そしてヴェトナム戦争の頃のある写真がうかんできた。格子の鉄柵の下に押しこめられた捕虜と

なった「解放戦線」の兵士が上を、カメラの方を見上げている白黒写真が。

サン・セルナンもロマネスク彫刻も群を抜いて素晴らしかったので、三泊してしまった。初日はこの体験を味わいつくそうと、遅く出て、日のあるうちに帰ったが、二日目と三日目は起きるとすぐに部屋を出て、とつぷりと暮れて闇になってからでなければ戻らなかった。そうせざるをえなかった。この部屋がいやになっていたのである。強制されなければとても居続けられない構造なのだ。

刑を宣告されたムルソは天井窓だけの部屋に移される。

人間は水平に移動する生き物である。すべての動物も水平に移動しているようにみえる。しかしたとえば魚、魚は頭部の方向、つまり身体的には上下軸の上部へのみ進んでいく。この運動はムルソにおきかえてみると、天上窓、上昇する運動になる。しかし上昇することはできないから、本来の水平軸をとり戻すためには、横になって空を見れば充分におもえるが、天には本来の水平軸を構成すべき障害物が高すぎる空しかないから、平衡感覚は回復できないのだ。したがってムルソは死が執行されるまで、筒状のものの底に押しこめられて、生を送らなければならない。思考は停止し、堂々めぐりするだけである。死の確実性（それも近未来の）と生の延長の不可能性を出発点として、ひとめぐりしてまたそこに帰着する。看護婦のいったように逃げ道はないのである。

「それではあなたは何の希望ももたず、近いうちに完全に死ぬと考えながら生きているのですか」とかれ（施設付司祭）は尋ねた。「そのとおり」<sup>(25)</sup>

だが物語に対しては物語をつくり出さなければならない。かれは司祭に思いのたけをぶちまけた後で、自らを、最も古い法の物語、刑死場に向うキリストに準えるのである。

残された望みは、処刑の日の大勢の見物人が集まり、憎悪の叫びをあげてわたしを迎えることだけだった。<sup>(26)</sup>

注

- (1) 「異邦人、太陽の小説」『ロラン・バルト全集』第二巻 スイユ社、四〇〇ページ。
- (2) ポール・ヴァレリー『海辺の墓地』。
- (3) 『異邦人』、新潮文庫、六四ページ。
- (4) アルチュール・ランボー『地獄の季節』。
- (5) 『異邦人』同前、二二―二十三ページ。
- (6) 同前、三八ページ。
- (7) 同前、六八ページ。
- (8) 同前、七一ページ。
- (9) 同前、七二ページ。
- (10) 同前、七三ページ。
- (11) 同前、七三ページ。
- (12) ミシェル・フーコー『社会を防衛しなければならない』、ガリマール・スイユ社刊、二七ページ。
- (13) 呼称にかんしてはフランス語の字義通りに和訳する。
- (14) 『異邦人』同前、三六ページ。
- (15) 同前、三六ページ。次の引用も同ページ。
- (16) 同前、一一ページ。(最初のかれは弁護士、残りのかれとわたしはムルソ)
- (17) 同前、一一〇ページ。
- (18) 同前、八三ページ。
- (19) 同前、八六―八七ページ。
- (20) 同前、八六ページ。
- (21) 同前、一〇七ページ。
- (22) 同前、一〇七ページ。
- (23) 同前、一〇八―一〇九ページ。
- (24) 同前、一〇九ページ。



(25) 同前、二二五ページ。

(26) 同前、一三一ページ。

〔本稿は、二松学舎大学論集第三十七号に発表した『彷徨者たち・その二 ムルソ（上）』の続篇をなすものです。〕